

## 序 文

一九九七年は成城学園創立八〇周年にあたる。それを記念して、記念式典・祝賀会、記念音楽祭、記念合同体育祭、記念文化祭など一連の行事が行なわれたほか、八〇年史の編集作業も精力的に行なわれ、一〇〇年史を展望した編集が行なわれている。このほか、「これからの成城教育を考える」という特別研究集会も開催され、今後の成城教育について熱い議論が交わされた。学園創立八〇周年にあたって、経済学部も機関誌の特集号を編集することで、成城学園創立八〇周年を祝いたいものと考え、この記念号の発刊となった。

現在の視点から見た成城学園の創立の経緯については『成城学園八〇年史』に詳細に語られることになる。本誌七〇周年記念号の序文で当時の岡田清学部長は「成城学園が、いまではすっかり都心になった牛込の一角に誕生したのは大正六年四月のことであった。記録によると「崩れ落ちそうなぼろぼろの古校舎」からスタートしたといわれる。大正十二年に、校歌にもうたわれている武蔵野平野の一角に引越してきたのである。大正十二年といえば、関東大震災の年である。この震災を契機に、神社仏閣などが多く、当時としては閑散とした郊外に引越し、東京の郊外化が一挙に進んだ。昭和二年には、小田急電鉄が開通して、至近距離に鉄道駅が設置された。このことが契機となって、やがて郊外住宅地としての成城の地が誕生することとなったのである。爾来六〇有余年、成城学園は幾多の試練をくぐり抜け、今日に至っている。」と書かれたが、記念文化祭の本部企画や高校・

## 序 文

中学の往時の写真などにはこの記述の情景がそのまま写っていたことが印象的であった。

二十一世紀を展望すると、少子化という確実な人口構成の変化が予測されている。就学人口の減少は教育機関の存在意義を改めて問い直させることとなる。『従来の教育学を根本より改造せんとするものである』とした澤柳政太郎博士の建学の精神の本質（個性尊重の教育「少人数教育、全人教育、自由な教育」、自然と親しむ教育、心情的教育、科学的教育を基とする教育）は失われることはないにしても、新たな展開を迫っているのかもしれない。一貫教育、大学全人問題などの当面の課題もさることながら、成城学園が社会に対していかなる人材を輩出しようとしているのか、外部からの期待と内部（ないし教員）の意気込みとの齟齬が気にならないわけではない。

いずれにしても建学の精神は成城学園のアイデンティティであり、二十一世紀に向けて成城学園の教育理念として不変であろうし、新たに燃え続けるものであろう。大学教育のビッグバンがいわれ、カリキュラムの自由化がいわれて早や七年が経過している。経済学部のカリキュラム改革も学年進行で一巡はしたが、未だその途半ばである。社会科学の女王として位置付けられる経済学の伝統を踏まえ、その新たな展開を着実なものとしつつ、経済学部には澤柳博士の教育理念を表現していきたいものである。

二〇〇〇年の成城大学創立五〇周年は目前である。大学の五〇周年は経済学部の五〇周年でもある。この節目にあたって大学そして学部が存在意義を確かなものにしておきたいと考えている。

一九九八年二月